

子どもの個性を尊重する学級経営のあり方

堀江 恵里花

(1) “個性”について自分なりの定義

“個性”とは何か…

辞書で調べると「他人とは違う、その人にしかない性格・性質」と出てくる。では、学級における個性は辞書的な意味と全く同じ意味で捉えてもいいのか。

辞書的な意味で「個性を尊重しよう！」となると、例えば「朝起きるのが苦手な子は、その子だけ朝 10 時に登校してきても大丈夫。」や「走るのが苦手だから体育の時間さぼっても大丈夫。」という考えもでてきてしまう。しかし、それは本当に個性を尊重しており、自分らしさを発揮しているといえるのか。

菊池省三先生の教育方針のひとつに「子ども一人ひとりがらしさを発揮する」という考えがある。『学級崩壊立て直し請負人』という著書で「子ども一人ひとりがらしさを発揮するというのが、よく、“自由”と履き違えられています。大間違いです。「公」「不易」などの一般性を身につけた上でにじみ出るものこそが、個性。」と菊池先生は言っている。

このことをふまえると、上記で示した例は、個性の尊重、自分らしさの発揮とは言えない。学級における“個性”は、「一般性を身につけた上で出てくる自分らしさ」のことをいうのではないか。

(2) “個性”を發揮できる環境

一般性を身につければ、どんな環境でも個性を發揮できるのだろうか。例えば、荒れている学級で個性は發揮できるのか。きっと荒れている学級では、個性の發揮はできないと思う。もし、そのような学級で個性を出していったら、“変わり者”として、いじめの対象となってしまう可能性がある。個性を發揮するには環境も関係してくる。そこで、再び菊池先生の著書を見てみると「自分らしさを發揮するには安心と自信がある学級をつくる必要がある。」と書いてある。個性を發揮できる環境とは、安心と自信がある学級であると言える。

今後は、安心と自信がある学級とは何なのか、また、そのような学級をつくるにはどうしたらいいのかを深く研究していきたい。